

常山紀談

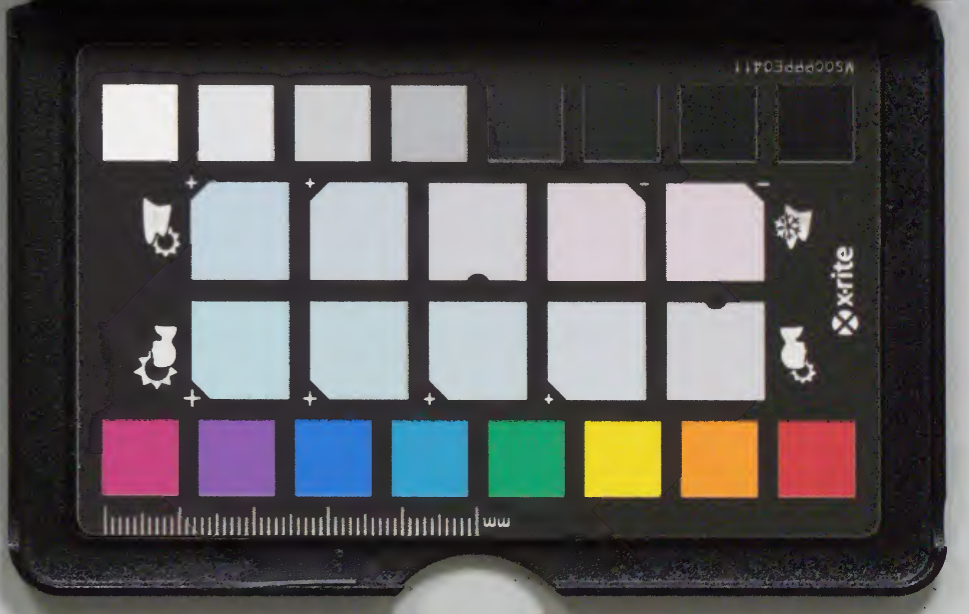
拾遺

和書門	
四	類
三	號
二	函
一	冊

內閣文庫	
和書類	四三三〇一號
一冊	一七〇函

漫筆雜考十五

內閣文庫	
番號	和 42301
冊數	17 (13)
函號	170 49



備前藩湯淺先生編輯

拾遺

常山紀談

書肆

千鍾房
宋榮堂 製本

常山紀談

常山紀談拾遺卷之一目次

淺草文庫

一長篠合戦小武田勝頼人数を出す事

一家康公甲の心得御示の事

一家康公合戦心掛御示の事

小幡景憲物語の事

野間左馬進田螺と以て勝負占物語の事

老幼の士相言葉物語の事

一家康公駿府にて相討御吟味の事

一柴田因幡守退治上杉景勝出馬の事

一紀伊大納言頼宣卿十三歳して大坂攻御先手と望る事

一高麗攻南大門合戦物語の事



- 一越前黄門秀康卿伏見御屋敷へ於国と召さる事
- 一津田長門へ道道慶物語の事
- 一大阪落城の貶細川玄蕃頭鑓合言上の事
- 一伊藤伊右衛門武田勝頼と討つと津田幸庵物がらるの事
- 一塙團右衛門持道具の事
- 一筑前岩出城攻秀康御年十四歳少く武勇御心入の事
- 一越後浪人大井田監物の事

常山紀談拾遺卷之一

備藩 湯淺 元禎 述

同男 明善 校

○長篠合戦は武田勝頼五月廿一日ふ人数を出す信長見給
 ひ敵も多勢あり三萬可有と宣ふ
 家康公仰ふ此度の軍味方勝なり敵丸く打圍り死を六ヶ
 敷散り人数を多勢に見すゆへ勢を頼まする間大方勝を
 里と御意ゆへ酒井左衛門尉承て尤なる義と奉感なり
 ○家康公被仰候は小身の武士着料の具足を威ませ候は
 胴籠手具外は席相小つて候とも曹との念を入る心
 得がよきぞ子細に討死を上げらるる曹の首と一所小

敵の手にはさうはなれり然るも死後の為めは
無かれば仰有候とあり右の上意は付上田主水入道
宗古物がつり致し候ハ士の討死を遂げ首は成る
それの義を心小掛うるがよれあり去り依てさうや杯
の後さうはなれり見苦し死間若き
衆中必後高は刺さる明日は必一戦と知まつる前日
ら首成奇廉はつる心得第一の由か

○家康公或は此上意ふ今どき人の頭をもすゆものぞを
軍法どてさう床几ふ腰どうけさはいを以て人数を
差使ひ手をもよごさず口の先此下知ちかりめて軍
に勝るものこ心得るハ大きめる違なり一十の大

将たるも味方諸人のあんのくほさうりを見て居る
合戦なりぞ小勝りも夏あてさうと被仰候とあり

○小幡景憲の物がつりふ大坂陣のそれ堀殊のちさう
して攻かうれとき本多佐渡守とあり金堀を入る
堀ぬき可然と家康公へ申上らさうさうバ尤あり
然るもさうして仰付られさう土佐或は伯耆佐渡
より呼上せうさ詮義のとき佐渡守いさう右の國
はもの不功さうさ甲筋の信玄金堀度々勝利あ
るさう甲筋さう金堀をよび己ふわらせんさう城内は此
由を聞て甲筋さう金堀来て此城を堀らさうとて躁き
さうめり其内は和談ふ成さう何う五年や十年の内

ふし七十間なり有堀をわしがうへは是より敵の
氣を奪ふ道理あり遠別高天神城は小原与八郎と
申入籠城志多ゆへ早速金堀りて矢倉をわり落し
うへゆへ城を河をさす敵城へ堀をえの矢倉の
まが堀付るあり是よりらげり又うへはさす
鉄炮の薬を百貫目あても横切火繩を付るあり我
籠城へ敵をわらばるはれに必そ此堀方ふの伏かまり番
河をなかりやすさありらる方へ此方よりも或は三筋ふ
ても四筋ふりあても堀かるとなり是より大く通り
ちりしが金堀妙は覺るあり又はやき物をめて候らば
方ちんしと云あり両方よりありあはれ互は分

るなり是れ味方歸り此方より多くらると流す也

○野間左馬之進物かより小田螺を折きけ斤隅小三ツ又
かゝ隅小三ツよせり両方へはもて一夜置くとき其合戦
勝負のまけの方を追ふみかまけ方へ進み出るあり
大坂陣の城中秀頼木村大野と稱して盆の一方小三ツ
まゝ一方は関東方 家康公井伊藤堂と稱して三ツ
たみしを置いて一夜置くふかまをて関東方の三ツの田
あし内方此三ツのたみし追込らるるあり勝負は
吉凶を兆ふて是よりまよきありしなり武備ま
は此兆を出しし考ふべし

○老功の士は曰く古法小相言葉を夜々小替るや

○云し大なる偽なりと心得ずし末々やうてのこ
ゆへ中々毎夜かゝり〜大阪陣のそら城内相
詞ハ山関東方ハ旄と唱へ〜ふ一陣をむむまで右
の相言一ツ宛み〜濟〜ふ夏なり是證據あり大阪
落城のそら城中より女中大勢おら〜る小旄とさ
云へ〜寄手ハ助る〜心得〜銘々旄々と唱へ〜出
たふとなり

○家康公駿府に於て御加衆の中より大阪御陣以後
去る五月七日若江村小ゆ〜井伊掃部頭家來三
人少〜敵一人と討とり三人相討と有之ふ付掃部
頭委細〜吟味相遂候へ〜相討〜極り今一人の申口相

#違ふ付掃部頭不思被致仕置候〜と申付候より申
上らま候へばそら義よ〜とかくの仰もな〜何も
聞へ〜惣〜物〜ふ余計と〜〜切つ免
〜ふ義あるれハ首上らま候〜り利長我
ハ余計の有候が能なり子細ハ織田信長〜小
身の節佐々成政と前田利長と兩人〜敵一人を
つれ倒〜成政利長よ向ひそら方敵を追つれ倒さ
ま〜義あるれハ首上らま候〜り利長我
ら〜敵を突倒〜〜〜込め〜鑑合の義を
御自分さるま首とそら方揚られよ〜互〜辞退仕
里候呀〜柴田権六も馳つ〜左申〜兩人辞退の首

あらば中みく我申請づ〜とて首を上げ我ら高
名の證據のう先兩人みも来り被申よ〜とて三人同
道みく信長の前へ出て権六申候ハ此兩人を
敵を突倒し首をとる取よ〜きとて吟味合候所
へ参りかくて首を某と〜参候と申候ハ信長
公御関あされ三人とも大小賞美つ〜され候よし
あり右三人とも武辺よ余計あるゆへちりりと
仰らる候あり

○天正十年十月柴田因幡守退治上校景勝出馬
みく候景勝先手本條越前守村上出雲守新津加治
等初合戦出られ方上橋と〜所迄敗軍仕り候景

勝旗本迄因幡守の〜り大事おあぶ所を上校
義春後入菴ハ旗本前備よて罷候景勝の紺地日
の丸此旗を〜り三十間ほど先へお〜り義春手
廻の士とも下馬つ〜せ鑓を〜りて膝の上をき
芝居よ折しき備へを立候よ付因幡守引返〜
引と〜り候と〜後を義春備を以て慕ひ追討仕候
あのみ宇佐美民部勝行ハ甲付の首を二ツよぶ
高名〜〜る身も手負て旗本へ来〜勘當赦免
め〜る景勝〜日見を願〜くまども父の仇此末と思
〜目見をゆるされず
民部ハ二ツの首を〜り涙を〜り〜罷あり候を上

是ハ民部父駿河守定行景勝実
父長尾政景とあり〜ゆへなり

牧家の平林内藏助井上三郎兵衛落合清右衛門其
場小有合せよく見て後よかつり候此と紀民部ハ
義春手小付陣仕候由

○紀伊大納言頼宣卿ハ文武の賢將あり其行跡も凡人
ふあらば大阪冬御陣小二條の城あり大阪表御手鎧
の御備定あり頼宣卿十三歳となり給ふに進出玉
以御先手を我らに仰付られ下さる候やうと御の
ごまおまゝ 家康公御感あり城強くして先手せえ
あぐみ候えしそれ方仰付らるごま御機嫌あり
五月七日大阪落城のとき御旗本後備あり尾張大納
言義直卿と紀伊大納言殿も御着陣以前合戦終り大阪

落城あり茶臼山にて 家康公御前小頼宣卿御出有
て今日御先手より無之由へ手合不申無念至極不
候と頻々御落涙ありれ松平右衛門大夫正久申候へ今
日御手小御あひあうまじ候とも御せ給ふされまじ
く候御一代もをかきよめと幾度も御坐のふまじくと
諫まいらす家頼宣卿関し召され右衛門をえらこと
御あらし候へ我ら十三歳の時又有べりや
御申 家康公関しめされ御涙を御浮へ御感悦不
たへば常陸殿それ言が金言あり候とれ御称美あり
まじふと石川栄入ものかづり也

○高麗都南大門合戦大明季如松三十万騎ありきううる小

早川隆景一組二万との合戦あり初め李如松ハ呉惟忠
張世爵等十万余リ山海関を出鴨緑江をくぐり朝鮮
不入小西撰津守行長大將あり大村新八松浦刑部卿法
印宗對馬守等二万八千あり推來り朝鮮の人馳加り三十
西を追て朝鮮の都さへ推來り朝鮮の人馳加り三十
万騎あり大友義統も岷山城におり閔逃し
落る小早川隆景ハ開城府より都より五里を阻
る其間大河あり其れ黒田長政久留米秀包も
白川と襄陽ふあり小西大友もこれ城よりいさる隆
景ハ開城府より踏止り大明勢三十万を引つけ一戦して
相果べく踏止り玉ひくるを惣大將備前中納言秀

家卿石田治部少輔三成増田右衛門尉長盛大谷刑部少輔
吉隆より飛脚をりつゝ早々都へ引さるべく候大河間
より阻り難義仕候間此表へ一所おつぢみ然ゆべくと
申越され候へども隆景ハ我日本より渡海の初めより
再び日本歸朝の心あり本朝大半納を國家無支ありまを
疊の上より病死せんを是の心よかりしに幸ふ此
陣出來何かりし満足り隆景年五十八死して
惜めし大明の三十万よかり合切先より火花をちら
し合戦し討死を遂んと老後の思ひ出さるに過ぎ我
たし討まじりとも日本の御弱ふも成るるに大明
三十万を此所にて待受べし少も動じ玉へざり

大谷刑部少輔只一騎開城府へ來り隆景對面し
貴殿の御心底古の名將勇士も此上過ぐべし但し貴殿
二万をりをりて三十万の圍を受て徒に討死せられ
んし本意ありたり速く小玉城小かたり惣軍を立備
御身惣軍を先手として快く合戦し死を善道小守り玉
ちと逆も死せん命忠義のに全からん早く都へ引入
玉りるべしひの諫ぐる小隆景心くる一尤候り何時
みても先手へ隆景一組申請候間他の望許容有べし
らびと刑部被請合候り王城へ引り申べし候大谷
そめづんハ我ら請人よ立候より申され候り付白川
小有し黒田長政へ此旨申遣り早々開城府へ引入申

へしと告遣りしければ長政も久留米秀包も小西行
長大友義統同道ふて文録二年正月十五日小開城府
引り申され候り付隆景大谷黒田久留米小西大友同
道おろ川を渡りて王城へ引入候隆景ハ右の所存申都
へ入らば南大門の外碧蹄館に陣より居られ候同
月廿六日大明廿万騎夜の内は河をりり都表へ推詰
候其夜の廻り番ハ隆景相備立花左近宗茂あり家
老十股傳右衛門五百余りて曉打廻口より出り大明李如
松が大軍と闇紛よりちこと行あひ立花が勢駈ちりして
引取候を大明勢追かけりり十股傳右衛門返り合せ
五百余散々不相たくりハ残らば打死する雑兵四五人走

かゝるこ此告る立花左近宗茂則隆景并小毛利七
郎兵衛元康久留米秀包高橋筑紫へ告知す隆景則王
城へ注進備前中納言秀家卿三奉行何れも追々小南
大門口へ馳來る夜もや明くる小遙小見もする大明李如
松が爰去と一里むらり備を段々立て只今掛らん氣
色なりそめ勢淵江の潮に漲來るがごとし先手二里余
小廣がり勢子並を立跡も先もろか旗もて影しけ
共中々なり秀家卿三奉行小大敵と野合の合戦いかゞ
あまは都へ引籠り防然るべしとあましと立花左近
眼をのりからし太刀は手とりけ大音上げかやの大军
は籠城しと叶べうと角とあれ野合戦もききとわ

然るがごとしと申さききし依之合戦もききし候諸
大將先陣をのりしと隆景眼の角と立我先陣するし
最前より約束なり他の望みもべうと隆景
そめくを配られし先陣栗屋四郎兵衛大將より村
上彈正野島掃部等三千あり二の先ハ井上五郎兵衛
大將あり佐世石見守吉見大藏大輔等三千あり三
番ハ隆景旗本一万あり備立花左近久留米秀包毛利
元康六千の奇兵と隆景の右北方三町をとり引
退てそめくより其日の合戦火花をちりし栗屋井上押
立らる候と立花左近横鎧を入き大將李如松が旗本と
突崩せし隆景も正面より切めけられ候と付大明廿

万惣敗軍小あり首數三万八千余隆景一組討り候
隆景立花手柄申モ中々疎まり此と立花左近ハ甲付の
首ニツ直取の高名よと鞍の鹽手ニ付大刀鐔本五六寸の
つゝ鞆へ不入と帯己も馬も未より先手よりあつ
しづと参らまゝに粟屋四郎兵衛備の前を打過とて
具備の組頭村上彈正野島掃部と呼かけ立花申るゝ今
日ハ立らまゝに所と推立らまゝ候とつゝを大將
粟屋四郎兵衛聞もつゝ立らまゝに立られ返すとも
返りたり我備ハ今日の合戦の花よなりとつゝと返答す
る聞もは粟屋を譽さるゝにたゞ一扱立花左近ハ隆景の旗本
へ参らまゝに立花自身の高名ニツまゝを鞍ニ付られた

るど見て隆景取あむ立花見と候と譽らまゝ候へバ
左近聞玉ハ毎事仕まゝするとの返答なりと自讃の言む
ありと其場よて聞人かゝられまゝ此と合戦未始ら
ざる時分黒田長政只一騎歩待七八人少く隆景旗本へ見
廻らまゝ候隆景見て長政ハ幸の所へ御とて候粟屋四郎兵
衛井上五郎兵衛と先手ニ申付候物馴ね者どもとみて心元
かゝ候貴殿先手へ越され毎事御指圖下さま候へと申
され候長政喜悅の色見へ畏り候とて先手へ越さる頃
ハ正月廿六日辰刻あり朝鮮ハ寒國とて寒夏不斜長
政ハ大綿帽子を着し甲ハ郎等小持せらまゝに隆景
の先手へ出ると綿帽子を脱甲を取て着られし

隠る兒倒の水牛の甲より水牛の角本を薰皮みく結ひ
付らまゝより扱甲の緒を止め先手へ出らまは後へを
隆景旗本數千の士卒をも長政先手へ御く後へを
今日の軍小勝よりと惣軍勢勇まふはより長政の
年を向へばそれ廿五歳よりそれよりいふて如此
人の慥と思ひを候の中々凡人よりあるまじきあり
長政常小宜ひし立物指物の海老の子ふして差する斗
あゝの働暇より馬より立行よりぬけて落るものあり
立物と穴をあけ受子より穴をあけ革を結付べし
とより自分大水牛の立るはもふす革をゆひ付ら
まはたを其と見見する人かより

○伏見より越前黄門秀康卿御屋敷へ於國とつみかづれ
女を召てかづれあづけて御見物あり水精の珠數を
アふか多舞うるを御覧なされ水精の見苦しとて御
具足の上に御かけ成され俄珊瑚珠の珠數を下され後於
國が舞を御覧なされ御落涙有之御意より天下小幾
万の女あまども一人の女と天下小評せられ後此女
我の天下一人の男小成と叶りばは女より劣るる
ハ無念なりと仰らまは

○津田長門入道道慶物がより一日根野織部が唐冠の甲は
立との鐘道耳二尺五寸脇立より但右の耳は立物の半分
より折掛たるやうにする太刀打は構ゆる

○島原落城の砌り本丸の堀下へ着者ありし鉄炮調りあり
るる小紀勇浪人平塚勘兵衛重近只一人押て堀際へ
付尾藤金左衛門薄紅の大吹貫をさして掛付平塚と共小
堀下へ付面もさらす堀を乗るる所を内より鎧長刀小
てさんぐ突それ内尾藤が口小突込られあきよと
るどあろを又真中を鎧より突抜終り討死平塚勘兵
衛も尾藤と同じくのり掛候を鎧より突落され已り
討死と見へくはを細川隆印内乃美庄右衛門掛合堀の
内より平塚を突伏居る敵をつれわし平塚ハ助子
平塚より起上り堀下へ付それ働き比類を但し
平塚勘兵衛重近ハ秀吉公御しき平塚因幡守吉就が

甥あり乃美庄右衛門ハ小早川隆景家老浦兵部大夫
宗勝が孫あり何れ逸物の末孫也と沙汰あり
○大坂落城のり細川玄蕃頭貞元鎧を合すると申上る後
小 家康公仰ふハ鎧合すかと云し左中に節々あり
物ありば此茶白山の北見へたる勝曼院の山小佐久
間不干筒井順慶荒木摂津守村重籠りて大坂の門跡
建如上人より攻候と見本の鎧合すと聞及びより
其外上方の鎧ハ聞及ぶる所は勝曼院の鎧ハ
昔より言傳ふる杉の鎧と聞召り仰られ
後佐久間備前守罷り出上意の通し御坐候同姓不干
手ふ其日の両度鎧御登候天正六年五月三日の合戦

あゝ御坐候朝ハ茶臼山の西一見へ俄難波の貝穀塚の合
戦して不干が與力佐久間久右衛門同葵之助梶原弥三郎
水野源太郎水岡小三郎六人鎧を合儀その晩勝曼院の山
ろろ不干が丹志水亦市江原弥介浮見藤介長瀬弥五右
衛門四本鎧合申し候長瀬ハ只今小右衛門と申加賀ふ
まろろ有候と申上る 家康公聞し召扱々利常ハ能
兵を抱持候と御意あり長瀬小右衛門ハ黒母衣銀
の牛の舌此出し小て勝曼より鎧を合する後門跡
降参し大坂城衆寄手小屋見物より出る長瀬が小屋
印銀の牛舌の黒母衣を見付日外鎧を合する母
衣爰ありとて小屋前より多く寄て見ると也

○福島左衛門大夫正則の存伊藤伊右衛門武田勝頼を討奉
りし士あり伊右衛門が咄と津田幸菴かゝれりあるを
甲刃滅亡のり候勝頼御父子の志は滝川左近一益先手
あり國中を尋ねる田野の奥天目山の麓に落人の男女五
六十人隠れあはるるありし押寄たるは皆々兵糧を
かゝ働事不自由あり何の手もなき討取然所へ滝川
旗本より早飛脚有之勝頼公信及高遠へととらぬ候早
々その本より罷歸する告るは是れで來る證據小
首の浅馬お付歸るし府中へ歸れば勝頼高遠へ
籠るるも風説あり沙汰あり田野より取る首も
はるか溝堀へ捨る然る所地下の夫ども其溝の前を

皆頭巾をとり頭を地へ付一礼して通るゝありて見て已
ら溝堀へ何ぞいんぎんふするやと笑ふ百姓ども申
破いあの堀中小屋形勝頼公御父子の御首御坐彼數十代
の御主と存礼仕候とてあゝ皆々驚て其首どもを取上
勝頼公御首と云を城介殿御座の間の床かんなか多ふの
せ置残の首どもは庭よちれ城介殿宜ひくるは勝頼の首
を滝川内ふてい誰うとてつらん同くは一益が甥滝川
義太夫が取たるちうらわ其聞へも可然と仰られしゆ
滝川義太夫とめし奥の口へ召され勝頼の首を御見せ
是は汝がとらゝる首うと御尋義太夫より見し是
は拙者とり候首あゝ無之と申則庭へ召され四十

許の首を御見せ候へば内首一ツ義太夫より出
し是は私のとり候首とあり出す則土屋惣藏が
首より義太夫と御戻しするれ伊藤伊右衛門と召
庭の首どもを御見せ此内小汝が取候首あり有りと御
たづね伊右衛門則残らば見て申上候は此内ふら
私より候首は無之と申上る御座の間へ召勝頼の首
を御見せ候へば伊右衛門見て私より候は此首と申城
介殿汝がとりうる證據はのにと御尋首の切口小
私の候馬栗毛猪毛の毛血よりとり付有之候
田野より鹽手小を付道みてすは候ふ付如此
と申上る御覧候實も栗毛の馬は毛付よりそれ時
つ古

城介殿御意みん汝ハ真加ノ叶々勝頼の首とぞり
つりこ被仰とれり近年の書物ぞり見ると事々
志々働く討死一玉ふ様一各たふもあまも我其
とれハ小平治とぞ滝川方小居し伊東伊右衛門とぞ
傍輩をききあつり見ると左様ふてまし勝
頼ハ鎧櫃ノ腰とが多太刀めて防たうひ玉へども飢疲
玉ハ何の働もななく伊右衛門が討奉ると板倉周防守重
宗宅まで津田幸菴物かつりたを

○塙團右衛門重之蜂須賀阿波守至鎭手へ夜討のとれ
木村喜左衛門畑角太夫牧野湖大田屋右馬介四人鎧と
合よるる内田屋右馬介持道具長刀之圖團右衛門

ハ長岡監物御宿越前守小向て田屋が手前鎧と合よる
とハ申上られ間とくと云族ありつると問御宿が曰く
鎧も櫛の柄長刀も櫛の柄さまご同しとらり長刀ハ鎧
より短きまご猶つらに働あまると食えしと濟まり木
村喜左衛門落城のとれ討死角太夫ハ稻葉美濃守正則へ
抱る牧野湖太ハ本多中務忠刺へ奉公田屋右馬介ハ五郎
左衛門と名をめ紀伊大洲言頼宜卿へ召出され五郎左
衛門後ハ田屋半右衛門と云由

○天正十五年四月一日筑前岩出城熊谷備中
と秀吉公一殿
責よ仰付られ俄御先手蒲生氏郷前田利家をりその二番
備ハ羽柴三河少将秀康佐々陸奥守水野忠重をり山半

分御上ホシり給タマはるニ落城ラクシヨウの間御上りミナ候コトと御無用ムコト利家トキエ氏ノ
郷サトより申しキタ来るヒデ秀康ヒデノカミ御年ミトシ十四歳シヨウジウあり手テ御逢ミト無コト
之コトも無念ムネンと思召オモシ落涙ラクナミるニ候コトを佐々ササ成政ナリマサ深く感カン
じシまシが家康イカサダの御子ミコ小コ御逢ミト逢コトなりニとシ
御ミせシ候コトをシ候コトて落涙ラクナミるニ候コト我ワレもサマ様サマ々々諫申イサメ候コト
よりシ家康イカサダ公ノ似ニ申マカ候コトとホメ譽ホメ申マカ候コトはヒ秀吉ヒデヨシ公ノ仰オホセ小
へ左ヒダリやうウめてテなりニ秀康ヒデノカミへ我ワレ養子ヤウジなりニ武勇ブユウの心
入イとシ皆ミナ々々秀吉ヒデヨシ小コ似ニ候コトとホメ譽ホメ申マカ候コトはヒ秀吉ヒデヨシ公ノ仰オホセ小
○越エチ後浪人ゴロウジン大井田オホイノ監物ケンモノツへ後越ノチ前ゼン黄門ワウモン秀康ヒデノカミ公ノ御使番ミツシバシ小
て奉公ホウコウ仕シるニ候コト仁ニの筆記ヒツキに曰イハレ越後國エチゴの代々タテタテ上杉家ウエサキカ領リョウ候コト
處トコロは永正十年六月廿日上杉ウエサキ頭定カササと家老カササ長尾ナガオ為景タカケと妻

有庄長ユウサダ赤原アカハラあり一戦イツセン候コト頭定カササ討死ウチシ為景タカケ則スナハチ上杉ウエサキ庶流シヨウリウ
上条ウエノの上杉ウエサキ定實テイジツをマコ婿ムコ小コあり我子ワレコ長尾ナガオ六郎ロクロウと定實テイジツの
養子ヤウジ分ワケよりシ頭定カササの跡アト立タテ上杉ウエサキをツグ継ツグするニ為景タカケ八男ハチノオ
猿王サマノウ長尾ナガオ景虎ケイコ後号ノチノナリ謙信ケンシンとシ性セイ尋常ヨウジョウ小コ督トクり利根リネ聰明メイメイにして大膽ダイタン
なるニ由ユへ為景タカケ氣キ違ヒひ出家イカサダとシ下越後シモエチゴ掾シロノ原ハラ
淨安寺ジヨウアンジへ遣ツケをシ後見ノチミ金津カナツ新兵衛ニシンヱ供ツケして下越後シモエチゴへシゆク
采山サイサン越エチあり米山メヤマへ上り四里シリ下り四里シリあり猿王サマノウ總ソウふ
八歳ハチノトシなるニ歩侍フシの背セ負ヲまカし山ヤマをト上ノるニ米山メヤマのト峠トウ了シ
草葺堂クサヅキドウあり米山寺メヤマジといハふニ此堂ココノドウの掾シロノ休ユて破籠ワカゴあり
出イし猿王サマノウもマ叅サイて供ツケの侍サマども中食ナカシクるニ乳母夫ウバメウの本条ホンジョウ
美作守ミササキノミもト供ツケなりニ猿王サマノウ幼コなるニ此堂ココノドウの掾シロノ廻マり遊アソび居カ

らまゝし米山ハ大山よて峠の薬師城よりハ頭城府内
を目の下小見とろす所あり猿王ハ故郷府内の方をな
がえ涙ぐみく継母の諛言あて浪人するごとく無念あり
成人し本望を遂バ此筋より一戦とて殊小此
山を府内を目の下に見おろし能陣場なりと宜ふ
本庄美作守金津新兵衛舌をうらみ感涙を流しその言
を忌む玉ふを悦と限をちし是則天文六年五月猿
王八歳のよりり九年の間猿王淨安寺あり学問せら
るるれども出家の心あり天文十四年四月長尾為景宇
佐美駿河守定行兩旗よて越中へよりけられ假松倉城
主唐人兵庫山下左馬介のり假を宇佐美駿河守三千

あてとてつた責落し山下左馬介の外二百余人討
果し松倉城をのり取直ふそ城は罷あり假為景と
八千余あり放生津の城へよりけられ假を城より德
大寺大納言實規卿の外公家衆九人籠らる假を子細
のりあり京都大乱あり諸公家衆を摸寄々に
國々へ落らるる德大寺殿ハ越中國畠山尾張守尚慶ハ
外孫ゆゑ其便し越中へ即越侯四月九日為景ハ城をせ
め落し德大寺實規を始公家九人上下七百余打果し
城をのり候所へ畠山留主居推名神保遊佐郡須
等加及の一揆どもをかくし後卷よ出假加及ハ一向宗
一揆より假偽て降参仕と申道を作りゆゑとて

引入は假為景加及へ押候とき推名神保遊佐等加及へ
授けり合候為景人數多し穴へかゝり大かゝりた
是為景も討死惣敗軍あり士卒散々小あり越後へ引
退り候宇佐美駿河守定行の十一日より止り敗軍を集
免堅固小板倉をひれ拂ひ越後へ歸陣する越中勢も
を付人と存假へども宇佐美が武勇小あそれ一人も
付ず為景討死たのきどもその子上杉六郎國を治て別
条より此年猿王の十六歳あり為景討死と聞忌中の
追善懇よ沙汰し三年過り義兵を上越後を打平べき
と工夫をめぐらし宇佐美駿河守をかゝりひ假も駿
河守も猿王の器量只者よたれを見うけ一味仕り假

天文十六年猿王十八歳元服して長尾平三景虎と名のり
同四月九日三年忌を吊ひ終て義兵を上椽尾城ふりて
籠る宇佐美駿河守本条美作守馳加りり假兄上杉六郎
ろきを聞て妹婿長尾越前守政宗よ七千余付て椽尾此
城へ取かゝり假景虎矢倉よ上り寄手を遠見して今宵
寄手へ引りあづればあつらひり其退口へ突て出んと
申され候宇佐美駿河守申假は長途を寄來り假敵い
かゞ空く引るるべく假哉突出候所いといと異見す
る景虎の白昼より寄手を見り小軍兵計あり小荷駄
なりし長陣の敵よこたうしを思ふあり突て出よとて
夜半よ切く出る景虎の積めり政景退口へ切て掛

至彼間政景勢惣敗軍あり彼景虎勝りのて追打す
〜國中へ討て出る宇佐美本条も押續て打て出務崎
の下濱に陣を取是より兄上杉六郎八千あり米山を
越て出向ひ彼景虎一戦をとり組彼とき坂織部後号鬼小
島度々介吉江織部をとりめさんぐお戦ひ彼所へ宇佐
美駿河守庵をとり横入ふかゝる本条美作守へ備あり
小静々とかゝり彼を死六郎打負敗軍仕米山へかゝる
府内へ退申彼景虎志づ〜真先は追討し進ま申さ米
山東坂本お景虎申され彼何と〜彼やとめわの
移ひ〜彼間志づ〜休打立〜と小家へ入と移り
申さ駿河守あをを見てあま〜のりる脚とめて彼

や今敵を追立彼この竹を破ぐ〜其勢失べ〜と米
山を追越彼も頭城郡へ打出府内の城をのりて海づ〜
彼早打立んと催彼〜も景虎ハ眠〜と〜高軒かい
て臥申され彼駿河守様々異見され〜も不聞臥し申
され彼故了簡もあ〜し運の極のと云叔景虎ハ上杉六郎
人数米山峠を三分二に越〜と越〜と思ふ暇分早貝と吹せ
景虎打立米山へ追上り彼如案六郎ハ下り坂小趣彼所
追付六郎人数電破坂より被追落死するもの數を不知
後宇佐美諸人〜向〜今日景虎米山坂お〜逃〜を不追
〜して眠彼を各合点致され彼や〜尋皆々合点仕らぬと云
宇佐美が曰府内勢米山へ逃上る〜是を追て若敵不

返らまはれ上^ウ手^テに敵^{トク}を受^ウて進^スせば返^カ定^マ必^ヒ定^マあり
景虎^{キョウコ}多^タ段^{ダン}を積^ツり眠^ムる真^マ似^ニして登^ノ坂^{サカ}を敵^{トク}不^フ登^ノせ濟^スし
下^シり小^コ趣^{ソウ}彼^カ子^シ追^オ打^ウ玉^{タマ}ふ我^ワ若^ニ年^{ネン}より數^ス十^{ジュウ}度^ドの^ニ逢^アし
うぢも其^{ソノ}積^{ツキ}をなれは景虎^{キョウコ}十八^{ハチ}歳^{サイ}してあはれ智^チ惠^エの軍^{クニ}神^{カミ}の
化身^{カヒシ}かや存^{ゾシ}彼^カと申^{マシ}彼^カ景虎^{キョウコ}の府^フ内^{ナイ}城^{シロ}をせえゆとて六^{ロク}郎^{ロウ}小
腹^{ハラキ}切^キらせ其^{ソノ}あち申^{マシ}れ彼^カの主^{ヌシ}君^{クニ}の跡^{アト}をつれうる兄^{アニ}をよ
ろし彼^カ上^ウの國^{クニ}を取^{トル}望^{ノゾミ}あしとて府^フ内^{ナイ}を出^デ高^{カク}野^ヤ山^{ヤマ}へ趣^{ソウ}申^{マシ}
され彼^カ関^{セキ}の山^{ヤマ}迄^{マデ}出^デ彼^カ上^ウ杉^{カシ}家^カ老^{ロウ}その談^{タン}合^{カウ}して曰^{イハク}景
虎^{キョウコ}あはれ越^チ後^ゴ小^コ重^{ジュウ}をさく我^ワ終^マにあり他人^{タニ}の手^テへ越^チ後^ゴ
を取^{トル}らるべくとて追^{ツク}め申^{マシ}引^{ヒキ}留^{トム}る景虎^{キョウコ}居^イ給^{タマ}ひ彼^カ越^チ後^ゴ
はくれう治^{ツク}べく彼^カや上^ウ杉^{カシ}代^{ダイ}の骨^{ホネ}折^{オリ}水^{ミヅ}にあり彼^カ人^{ヒト}と

心^{シン}外^{ガイ}ありと達^{タツ}て異^イ見^{ケン}まする景虎^{キョウコ}さうぶ以^イ來^{ライ}とも我^ワ
ら下^ゲ知^チを背^{ソカ}てと起^キ請^{キョウ}文^{モン}を宿^{シュク}老^{ラウ}中^{チュウ}いふまに彼^カりて
歸^{カヒ}べと云^{イハ}其^{ソノ}上^ウ杉^{カシ}家^カ臣^シ廿^ニ六^{ジュウ}人^{ニン}己^イ來^{ライ}りて御^イ意^イ次^ジ
第^{ダイ}一^{イチ}仕^シべくと起^キ請^{キョウ}文^{モン}を昏^{カク}そとあはれ立^{タチ}歸^{カヘリ}春^{カスガ}日^{ニチ}山^{ヤマ}の城^{シロ}
小^コ入^イ上^ウ杉^{カシ}宣^{ノブ}實^{サチ}の上^ウ条^{ジョウ}に居^イ玉^{タマ}ふと申^{マシ}合^{カヒ}越^チ後^ゴを治^{ツク}られ
長^{チカ}尾^ビ越^チ前^{ゼン}守^{シュ}政^{セイ}景^{ケイ}を引^{ヒキ}付^{ツキ}上^ウ及^キ平^{ヘイ}井^{セイ}の城^{シロ}に管^{クワン}領^{レイ}上^ウ杉^{カシ}憲^{ケン}
政^{セイ}へ隨^{ヅク}ひ申^{マシ}さる小^コ付^{ツキ}扱^{サツ}年^{ネン}頃^{キョウ}不^フ義^ギ河^カ系^{ケイ}者^{シヤ}野^ヤ心^{シン}多^タき頭^{カビラ}
を上^ウるも其^{ソノ}大^{ダイ}身^{シン}も十^{ジュウ}六^{ロク}人^{ニン}林^{リン}泉^{セン}寺^ジみく切^キ服^{フク}申^{マシ}付^{ツキ}る
然^{シカ}まじも前^{ゼン}の起^キ請^{キョウ}文^{モン}あるゆへ小^コ餘^ヨ人^{ニン}さうく言^{イフ}てさうら
む景虎^{キョウコ}越^チをさく静^{シヤウ}めとて皆^{ミナ}宇^ウ佐^サ美^ミ駿^{セン}河^カ守^{シュ}に相^{ソウ}談^{タン}して
如^カ此^{コト}謙^{ケン}信^{シン}の上^ウ杉^{カシ}を継^{ツギ}つる兄^{アニ}を殺^{コロ}し子^シ孫^{ソク}を立^タるこ天

道は背より十八歳に出家して不識菴心光謙信と号す
廿二歳より上杉憲政の譲りを請上杉政虎と号す永録
三年五月上洛して公方光源院義輝公より一字拜領し
輝虎と改む菊桐沢浮瓜の紋の幕細代の興文の裏谷御免
あゝ関東管領に成越後佐渡東上野越中能登飛驒加賀迄
手をおかけらば彼に凡人みくは有べうべと云

常山紀談拾遺

常山紀談拾遺卷之一

